

鶉衣

續篇

惟序

F

294

3

逍遙文庫

文庫6

718

3

70  
65  
60  
55  
50

中身はなほなほの國に平治の都は  
 なるはの里は一をなほなほの半は  
 也るのるなほなほの尾は  
 君はなほなほの中はなほなほ  
 ころはなほなほ  
 君の侍はなほなほのありは  
 なほなほの月はなほなほのありは  
 たのなほなほはなほなほのありは



○ 100 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

○ 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40

○ 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55

○ 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70

○ 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85

○ 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

○ 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115

○ 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130

○ 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145

○ 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160

○ 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175

○ 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190

○ 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205

○ 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220

○ 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235

ニ巻のついでにこの稿の...  
あよたよ

文の末の

...



轉衣續上



文章... 或曰腹は鼓一記  
...

...



よりまらけ物とよにふれ、酔多、初芝、其  
名の、一、あ、い、な、ら、一、高、士、の、ま、か、れ、を、も、と、ま、や、  
あ、い、な、ら、一、倍、を、ま、よ、い、其、物、其、名、の、由、を、  
い、て、あ、い、の、名、も、ま、せ、り、我、才、の、藻、屑、を、何、と、  
其、行、よ、と、ま、す、一、つ、只、予、は、酒、腸、の、之、一、く、て、八、仙、の  
仲、満、も、入、り、も、是、よ、對、と、地、の、い、い、い、か、ま、  
是、の、一、田、子、の、一、く、と、う、も、と、う、ま、

僧或人書

吾子、今、講、武、を、以、て、軒、号、と、し、う、も、能、諧、ま、し、月、ひ、て、  
名、を、す、あ、い、白、く、す、や、吾、子、い、れ、り、武、門、の、人、や、  
何、う、賣、ち、の、暖、い、處、よ、何、う、屋、と、ま、し、油、賣、ち、の、看、板、よ、  
油、屋、と、名、の、一、買、と、ま、し、人、の、ま、ま、ま、さ、い、て、め、か、れ、い、其、  
い、れ、れ、り、吾、子、く、風、雅、の、見、負、か、る、よ、り、武、を、一、つ、ま、  
混、せ、ん、と、す、私、の、迷、い、と、い、ふ、一、壺、を、積、ま、て、詩、を、  
織、ま、す、も、扇、と、あ、て、秋、を、ま、ま、と、ま、れ、ま、れ、是、ハ、是、  
よ、い、て、ま、も、是、と、い、て、それ、と、あ、い、い、ま、それ、を、い、て、  
是、と、害、せ、と、文、武、二、乃、と、稱、ま、し、其、事、諦、ま、す、を、  
人、是、を、笑、み、ま、し、い、れ、と、名、の、一、い、甚、具、一、五、を、  
井、々、射、法、の、辨、す、或、人、是、と、評、し、て、曰、く、文、の、始、は、  
武、士、の、武、士、具、ま、い、鼻、と、掩、ふ、と、書、て、人、の、侍、り、は、計、  
を、ま、し、武、藝、と、あ、て、ま、す、一、つ、と、い、ひ、て、此、の、潮、り、  
蓋、と、い、て、こ、こ、其、ま、書、し、一、つ、鼻、具、ま、い、甚、具、土、の、  
一、つ、藝、の、自、慢、ハ、侍、着、と、無、人、や、律、と、あ、り、一、つ、侍、の、

破戒と無慚と経學よりの人、人の不行、存せしむる  
 ありしと、ありつてありしとを、せむせむし、ふく宝の拾め、  
 して異も、療治も、不も、あな、白蔵、口  
 を、開、扁、髡、よみと、袖、うて、只、つて、せ、て、る、より、か  
 ち、新、當、流、も、正、法、念、流、の、い、り、り、武、士、の、常、う、と、  
 ら、れ、う、と、出、下、め、あ、れ、と、誰、う、武、門、は、生、れ、て、是、と、  
 一、た、め、に、二、流、三、流、の、印、可、免、許、も、い、か、る、は、  
 た、い、と、天下、の、名、人、い、ゆ、め、り、人、も、あ、り、世、は、終、ら、  
 ま、て、各、列、の、こ、も、や、世、は、馬、と、る、こ、も、人、あ、れ、と、山、上、  
 入、道、の、名、と、も、う、と、い、入、道、は、方、は、あり、て、入、道、の、  
 ち、ま、披、着、る、と、い、昔、亦、人、教、と、自、讓、して、この、教、の、  
いかる、い、ち、う、い、定、家、家、隆、も、静、か、い、達、た、り、清  
 しく、返、り、は、教、邊、達、た、定、家、家、隆、も、あ、れ、と、こ、の、中、  
 も、い、ぬ、あ、り、り、り、り、り、り、其、の、い、思、ひ、の、あ、り、  
 師、匠、下、に、あ、り、し、子、の、師、匠、と、紙、も、あ、り、と、  
 神、の、も、本、と、い、遼、東、の、交、や、め、つ、り、さ、る、と、い、こ、い、  
 も、こ、の、り、の、衆、の、思、ひ、中、り、て、と、い、或、れ、こ、の、下、の、り、  
 や、つ、り、い、は、佐、木、権、原、を、先、陣、と、降、し、と、搦、め、教、  
 万、の、油、ひ、く、一、騎、も、残、り、と、い、これ、は、謙、言、と、い、  
其、言、も、か、い、是、も、て、戻、り、り、り、り、余、り、不、奉、や  
か、り、得、違、い、や、二、騎、より、か、渡、され、ぬ、川、ち、り、り、  
 何、も、不、意、の、先、陣、して、大、死、と、い、す、き、後、陣、の、つ、く、  
 川、を、さ、れ、り、と、先、登、の、功、い、と、れ、折、武、藝、十、万、人、  
 は、勝、れ、り、と、用、し、不、義、な、り、と、明、志、と、誅、せ、り、



士氏の行跡もあぐりては功なり名なりと余カ  
 り仁義五常の事とすべし其の家我  
 も舞語もぬれ物も多しや五常の  
 智矩もつれて何ぞ其功なり何ぞ其  
 名なりむ家と建て後よ地築せしむら  
 功なり名なり我の行の仕上と云えん  
 才退きしは言ひて是れ仁義の  
 字向の徳居し是れは習ふは異なり仁義  
 五常と云ふも重言なり是れは報之縁  
 のせし五常もあぐりては先づ五常の  
 仁義ありて仁義五常といふ及も  
 うのそ申すはありては是れは  
 是れ能潜は去りて是れ能の鼻をせり  
 の老しは孔子の肌息を這て是れ道徳  
 物もあぐりて勸學院の権り蒙求を  
 声き清ぬやりて鄙生をふめ  
 是れ乃及のくは其世に生れ合せ  
 直事とて必上も極めは潛移傳  
 也指の侍とすれは祖翁の血脈を  
 五早の名人の一人や是れ又弱の方  
 は一人は渡りての責上げは文の  
 同くは行はれは能潜は定めて上  
 てやありては武士は其具として  
 泰平の代は是れは挿村上り上り

いふ人も其場は臨み其てよあつてはねに不ういふは  
うらまへれすといふを思ふにありて言ふて人よ  
拳とていふの入り是を我里とていふは亦度といふや  
くり文選の能階の文集とていふけい一巻ありき  
下巻ありといふ語もなりあ子一の異をちりふに記念の  
整よりりてよまのちう一何れよけ辨ありやと潜よ  
浮りいふ人もありといふ是も鼻とていふは權のこ  
おろこく人も其非といひて物よりさくれハ武と  
講とて兵と解め武士とて勿言とて附合うれハ能  
講よからいといふも一早くは号と改めよ一我も武  
門は生れられハ勇一は先ツ鼻と挿ふて一うりあし別  
鼻とていふは鼻とていふは鼻とていふは鼻とていふハ  
白いハ鼻とていふは鼻とていふは鼻とていふハ

能席旋

- 一 袴とていふは辞をあらまといふ
- 一 夜更て時を向ふといふ事
- 一 但務のの斬はちうといふ事
- 一 世間をいふはちやつくといふハ王術と塵尾と揮ふ
- 一 右先達ての定よめれといふと捨てて菴の新制とて飲食  
もいふり亭といふのちうなれハ客のつ得よ及あといふ  
且ハ言はれ似といふ人も口よといふも茶といふも  
いふも茶といふも茶のちうなれといふも守といふも

麦飯も刈之石の内をさぐり

稽人能席定

一飯はちの茶専用さぐり汁をさぐり勿痛うとさぐり  
茶ちのさぐり汁をさぐり

一茶はちのさぐりて裏身は右より包を珍奇と必おむとさぐり  
たのさぐりて裏身は右より包を珍奇と必おむとさぐり  
いふものありさぐり

一考の物ハ痛すさぐり及さぐり

一りハ痛さぐりの好ありさぐり定整は右は准了

一酒ハ盃ハ大小あれハ上戸とてハ二献は酒さぐり

酒ハ盃ハ大小あれハ上戸とてハ二献は酒さぐり

宴會をのねハ志してすむさぐりさぐりさぐりさぐりさぐりさぐりさぐり  
たのれハ膳ハ一茶のさぐりさぐりさぐりさぐりさぐりさぐりさぐり  
肴と名つけて一膳さぐりさぐりさぐりさぐりさぐりさぐりさぐり  
雪雲の夜風は帰路の寒さと防むハ膳後の世子と  
残さぐり一膳満尾の上はぬいて一献をめぐすも又  
其時の掬振はさぐりさぐりさぐりさぐりさぐりさぐりさぐり  
堅く皆さぐりさぐり相撲芝居の果ハ必信解は成りさぐり  
能潜の集會の飲合は流さぐりさぐりさぐりさぐりさぐりさぐり  
其さぐりの執事さぐりさぐりさぐり公羽のたさぐり茶ハ石ハ皆人の  
口ニさぐりさぐり其さぐりさぐり思ふ人サハさぐり茶ハ皆人の  
汁ハさぐりさぐり有教なれハさぐりて茶ハ教と茶ハさぐり  
さぐりさぐりの繪のさぐりの茶のさぐり茶の膳ハさぐりさぐり

くくハ行脚の傍の頭陀とすて廿行馬廿行打とつれ  
くくハ本迄の本情はあつてくくハ梅二  
このくくハと思つてくくハ能席の旋を清めくくハ  
信り志と賞りて饌具の定とくくハ後くくハのや

修鄙文

勤勤壽天の端はなりて修の壽ハ世ハと斗めくくハ  
石の性ハ硬くくハくくハ子母のあはくくハくくハ  
苦くくハくくハくくハ只事くくハくくハの幸よくくハくくハ  
くくハくくハくくハくくハくくハくくハくくハくくハくくハ  
其齡ハ月とくくハくくハくくハくくハくくハくくハくくハ  
られてくくハくくハくくハくくハくくハくくハくくハくくハ  
くくハくくハくくハくくハくくハくくハくくハくくハくくハ  
下くくハの嬉嫁ははくくハくくハくくハくくハくくハくくハ  
くくハくくハの修ハ昭近のつくくハくくハくくハくくハくくハ  
計めくくハくくハくくハくくハくくハくくハくくハくくハくくハ  
致仕大夫澁徴君の近侍くくハくくハくくハくくハくくハくくハ  
くくハくくハのあより一面の修と揚ふあくくハくくハくくハ  
くくハくくハの記と亦くくハくくハくくハくくハくくハくくハ  
くくハくくハのつくくハくくハくくハくくハくくハくくハくくハ  
春のくくハくくハくくハくくハくくハくくハくくハくくハくくハ  
くくハくくハくくハ

仍某求作序



るくやてせん人のまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
て老のりり人のまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
も縁のみいふまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
幽居かゝるまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
いはばいふ勝寺の頼きいふまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
ちうちやまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
一いついふまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
それいふまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
業といふまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ

一 徳辨

鞠とすゝぬ人の九枚ありてそのまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
あつては馬を九枚いふまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
さつとくまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
かつとくまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
まゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
おちには飲食のまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
はらもまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
條中納言の飲食のまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
や人のまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
いふ縁地のまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
いふ縁地のまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ  
の茶人といふまゝ敷たれ是と縁地と因縁といひ



ふむをのいふんか〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜  
〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜  
〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜  
〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜  
〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜いふんは〜

死すはふ念佛中々ぬくハあれ〜

わんはふふ小便をぬく人〜

東南東遊記の百葉の巻

師の画つたと存ら〜〜〜〜〜  
あゝのあゝ〜〜〜〜〜  
あゝのあゝ〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜

若菜賣序

七十二候のこつと〜と者て御階の月令あり暮月文樵の二士集の  
ゆ〜〜〜〜予は序と云は〜は田角はね〜を〜は若菜の好〜  
推す涌立ちて菜名の松た〜は怪〜は〜は誰も  
〜〜〜俗言の有〜は甚口正凡の本意〜  
乍麻生〜は御階の上〜は〜は〜は  
苦持あり〜は海あり柳〜は〜は〜は  
御階の好〜は紅の好〜は〜は〜は〜は  
風も勢〜は〜は〜は〜は〜は〜は













川つらふれて踏るもさうさうと驚ろりとも何の向目々  
あゝと只は物の言世にやありとてわん人も女仕の如  
世まつれよよあつらゝるひをたさおまもあよとわん  
いそつらふ物もあつらゝる其跡まつらるゝ越え  
すままつらゝる安静の境に至るゝ心は寂はあやうりもの  
なまもあつらゝるも只いゝとよゝ用ゝ人よあひゝ幸そ  
かゝのゝ世のつらゝるゝとてまゝゝ老君の是と物好  
久ゝゝ存右よめてあゝいひひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
新とて錫りゝゝゝを蔵すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
一語の記を求ゝあゝ思ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

宇都宮の衣

浄交を賞

住柳町

所の名よあゝ遍昭ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

續後朗詠集跋

むふの町よさゝの町よあゝ醫師ありとて年よこ度名  
さゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
論ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

二度の撰集ありて題号に同一朗詠なりうの匡  
師を以て是と志りぬよ世の人のもてをすまは  
なむくし

為或人書序

五十にして親を慕ふは世にありきといふも昔  
大賢ものいひ七十にして慕ふ人今冬を陽乃  
箕山翁にけ秋先考の五十回の時佛に託す  
いとよむいさや其生前はすききして其の  
能士よの向のうとむされは水の清くぬり  
うけんわんまもよせぬりやういふも  
いふもわんまもよせぬりやういふも

先人烈志子の貞享元禄の時ありて其角出雲守曹と  
友として深く以雅よむりて其世の旅の古集も  
つんてり其子にまもりて以日月の才は富も  
は世にまもりて昔曾子羊裘と合はるる父の  
とむりすれはや今け箕山子の能活を致すも又  
父の情を慕ふは孝なりて捨是は孝なり  
しとすを捨ると捨ぬる事なき追慕孝情の重  
をせ行も只約なむり清くて擲行のこよ及ん  
ぬり擲行のこよまも孝子の追福よ真国に  
ん





城下より高き家へ移されし事ありしに、指一本のありし  
 たりしに、利欲よりつゝのりし事ありしに、畢竟に世に別れ  
 三字の家名も、蔵も、盧生も、草履も、あつて、時々の種  
 菜の如く、嘆息の身と、襟の袖も、うらぐれありし事  
 へ、世に多き事や、といひつゝ、さうさうの、袒肩の  
 へ、むむ、蒼も、人の、何捨く、誦ありし事、其推の木の  
 信と、暮へ、いぬの、つゝ、似、と、ありし事、一戸の、ま  
 と、ありし事、と、す、と、い、は、茶、は、好、ふ、人、を、り、と、  
 へ、愈も、恒、と、と、と、あ、と、め、ち、り、と、れ、は、境、は、より、り、て  
 へ、轉、と、と、と、あ、と、の、め、よ、い、と、む、昔、の、教、三、つ、者、今  
 の、能、借、其、以、信、に、通、の、す、と、い、は、い、ぬ、の、つゝ、と、め、や  
 へ、中、の、と、長、月、の、の、水、仙、と、と、の、雪、回、は、ぬ、サ、と、  
 さ、と、二、月、の、筍、と、孝、行、の、と、と、は、あ、と、と、と、と、と、り、の  
 初、物、と、争、へ、二、月、の、梅、秋、の、サ、カ、子、の、捨、と、む、と、早、と、む、  
 へ、と、と、と、凡、雅、の、上、と、思、へ、一、年、の、内、の、梅、の、と、と、と、と、  
 ろ、と、と、時、の、貴、族、と、れ、其、余、は、何、と、の、物、と、何、と、と、  
 只、の、と、と、雪、残、と、と、と、蜜、と、と、菊、と、と、名、残、と、と、暮、と、い、ぬ、と、れ  
 物、と、と、と、手、は、懐、と、と、と、行、と、め、と、と、と、め、と、と、と、と、と、の  
 時、と、と、と、何、と、と、と、と、と、と、階、行、約、の、足、と、と、と、の、報、か、か、と、  
 と、と、と、と、と、と、一、早、い、茶、人、と、待、と、と、と、と、と、と、其、と、と、と、と、の、と、  
 と、と、と、と、と、と、凡、雅、の、奉、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、

伊勢序 其考句集其子洞同々亦も進

石の伊勢を披く金玉有綿糸やまらさし末人の燕石  
もあつと見くらの鯛と尚よまらさしこゝ教ふて  
汁ふゆさつれい其玉も價をのめてこゝんといわす  
只これ父と慕ふ孝子のひよなわらさしりやまや  
よ一の春はあはれりくも昔はあのみ末さつれい  
そとこゝととるいといさりぬく一介は葉よ序  
と流れて生るの至孝回くといちぢり人其  
誠と成つさつれいや我う辞やまらさし草とさつれい  
下れうあわらや

九日享彼先生辞

我と生むものい父母やまらさしと慕ふとまらさし先生たり  
僕ら今二年の秋い病やけ六十一とさつれい世のたつり  
たつりわらさつれいも思ひ人左思つれいもやさつれい向い  
ていさつれいもつさつれいぬいらさつれい先生  
の良劑りさつれい再九死の地と出て世の今草は  
黄く落虫の音より行り我らいさつれい公地  
このりさつれい菊はさつれい病とさつれいあつれい  
さつれいものさつれいけさつれい拾ひさつれいものさつれい  
あつれいものさつれいさつれいさつれいさつれい例の  
一癖は止すさつれいさつれいさつれいさつれい先生は昔  
さつれい

菊のりやまつれいゆさの東の離まらさし

三士挽三ヶ

只平々の上とゆひふもあゝいなきつて世に教をわく歌は  
老の常うらと今平いうら春うれはうらまて古に  
友と生うらむ睦月も若葉ついで有母子世とらぬ  
十々いふよこしてなまき力や初齋

と袖の深もくもぬは其サロ余り百担身まうりか  
うれいぬぬ世と捨人下は行菴も好いうらまら  
なれハ明きようこいーと立登り世常の種もる  
うらまたらひくハ想思いさうしも多し

摘葉ヤ一友と其世の種

思くもこつとあ悲うらとこささるの初再んまら  
古く友と生うらこ  
なうらうすは指とる葉も寒し

尔何菴語

こよちら何々法師の書もち奥管てさるはあはれ  
只世と道れ只雅はあふの砂存撰は似くこむと若  
よまうせとく書後わやう今世よぬぬ月とら  
こら人といとと

示先以辞

横頂かたの先以ハ桶と結と以て葉とて深く菴門の  
只雅は宛りぬハ世度りの傍らふとらハ向上の目

よほふ多の浦浪くもくも予さあ時らねよあめ子  
凡雅との家業を好くくも家業との凡雅を  
妨くく一せぬも其日の能階よして階も其夜の能  
階なかりけく五論よくいつりあらも  
ゆりの仇うも契とくくも又好まむもいもめ  
高く論とれい思すくくのもくも能階よかりて  
とや月更てく十市の里の哀もも通あふんくく東  
舎と書てよめぬ只其家の家よもくもいもめ  
浪の音くくお添て長く凡雅の可かあわれくや

如是菴掇詞

かりそのの落して立別りくくも上遠くくく  
おとかりく南空坊く魂よ告むく祖公翁浪華の落  
と信く嵐雪の謙念の月よ身よ終あめり能階  
行旅の潤すくくくのとくもれく如是菴何とく  
くも何と敬くくくくくくくくくくくく  
我く年月もくく一信字哀れなもくも世度く不之菴よ  
ゆくれ今亦け僕と捨るの力のいつれく人の上も  
くも同くくく

あめくくくくくくくくくくく

子右切子書

もくく其悪くくくくくくくくくくく  
言と捨くくくくくくくくくくく



本李物々耳よ入る酒を申して併賣とて一徒を茶の  
 賛ハ無二子のこころは及るに毀譽ハ人々のまわら  
 くの君らいあ可確論よして孫に今をこころはよ何と  
 かくむ志よ先よいふこころ我君と語るとせむは我又  
 清き老るこころ只儻々の清きと恥と願君分  
 てふこころ其りあ他よあは君蓮二と語ると  
 つけよいま支考と称とてこころは儒士ハ叔氏  
 と信とて其強のよろしとわれハ儻よとて  
 身の上の益と一徒ハ儒とていやめと其との  
 理よけハ願用して今日の法とて内法はくくの  
 一考や支考ハ其門の後良や旧法めとて  
 能語とて一物の文操十論の法よゆいとも  
 是と語るとなれそ我ハ君をす物より君り  
 帰てよと忘れむ其損只君はあり君り我とて  
 悪とて其損我はありとてわら清きとて  
 しくとて我くおこはあり何ハ今書とてす  
 し多言まは思ふ一但君よとす  
 君と我といふをらんや急而亭の秋りよ  
 川崎や酒りよ厚一訪れむといつれのり又  
 一飲は相笑して之秋の回と解むのと多罪

梅の日の序

其舊公物生之財の七部集とて世はあつて中よ又この口の集

尾より五分仙といふありきりきり暮雨巷の門外驛六  
けりきり五分仙といふありきりきり暮雨巷の門外驛六  
往昔作事軒のありの公物を招きて其ワをかわるもの  
して其書の廿何なり等々いふまは遠せやいづれの  
糸糸は出さるりいふをすされハ暮雨巷曉其皇子是を  
よ〜〜と尊とて社中よ〜〜して西遊の五分仙は  
つ〜ね再尾張五新仙を結ひ〜〜稿ありて固〜  
誰ハ初の尾よりつて貂を結〜〜り〜〜祖廟の  
魂り〜〜り〜〜も眼み〜〜貴〜〜い〜〜人  
た〜〜い〜〜い〜〜實ハ本州の面志〜〜い〜〜  
浄写は臨て予ハ一語と〜〜い〜〜嗟半是〜  
世傳ハの發事也 行〜〜口と替んや〜〜年ハ相わぬめり  
龍津方ハ糸糸は〜〜ありの〜〜冬〜〜の日の程〜  
わ〜〜と初書と〜〜い〜〜り

郭公文墓記

郭公の文を名はゆふ二つは浪は立並〜〜い〜  
わ〜す共持〜文墓ハ世と造れ〜〜い〜  
り〜〜客〜〜してた〜茶〜〜い〜  
不用の物ハ〜〜い〜  
〜〜二十年ハ近〜通口〜  
〜〜物倍〜〜序ハ世〜  
〜〜地〜〜い〜  
〜〜得〜〜い〜

あしてすいじくは思ひに必情をのこすのよしやはさや  
わいふようつふんやうしなほしむとあらく一長明の車  
ついで建つ朝ついでさくついでの方丈よりよ折  
及終世の望を待てるこめいと思ふよわいの  
わりのなむいひもて今世はけこの行くともや丸  
ふかきわぬや兵衛待たて家は一脚の二えらぎ  
稀らりていふ書書るのらりてす者のいひ  
つゆさるうり葉ももつんをわもと立ちて  
むつて只一画もいふともなつに物あらうやこの  
一脚と新製して草序の蔵物にのせやの  
後、村のいふ吉田の法師と悟らるる  
いふはたまたまはたはたの法師とわい  
けなをうごふかきいふいふいふいふいふいふ  
一や二や三やうううううううう

白蔵の替

醫者のそち死さうと出家の地獄とあつて人の口  
の飯粒を食ふ心よりまづ我ら鼻毛をさうりて  
え

異るいふ虎は尾をばや白蔵と

橋の白小序

赤井氏壽葺のいのちよ千の橋と徳らや只好人の  
興と橋のいよわいとめつて持言まゝりて佛縁は



むさふらめむすまあり刻や方ほ極の句と後集て水く  
宝さあよめむと其志うよ及て戸子小序の需ちり  
我き後京極坊政敏のいよむく詠う極のいよ  
しあてようのと春のふとわくむく是とけくち万世の  
後もあむむ人の極うゆのめと慕ふことう野  
よ、其人とあてことよ、其人いらあてされ、不朽の  
名よ、いよ、いよ、我り短才も、他のいよ、いよ、いよ  
——只中一句と奉て叙うの芳の存のそ、けく  
むさふらめむすまあり刻や方ほ極の句と後集て水く

今極、極や世の春のそ

八橋集序

~~~~~の年月よあ~~~~~のむ~~~~~男  
ありありあ~~~~~序草~~~~~て凡雅よ極あま  
け國よ~~~~~名よ~~~~~八橋集選ん~~~~~思ひ~~~~~  
このむ~~~~~その~~~~~水行川の泡~~~~~け  
~~~~~この捨~~~~~二この~~~~~人~~~~~  
~~~~~一部の切~~~~~れ~~~~~者~~~~~りて谷  
~~~~~端よ~~~~~け~~~~~母~~~~~て只四季の  
~~~~~て是と~~~~~や~~~~~且選者の洒落  
~~~~~其澤~~~~~の~~~~~のゆ~~~~~あ~~~~~  
わり~~~~~は集の~~~~~と~~~~~り  
もの~~~~~の~~~~~つ~~~~~わ~~~~~小序~~~~~後~~~~~老の  
~~~~~何の~~~~~あ~~~~~む~~~~~辞~~~~~も~~~~~辞~~~~~得~~~~~

すろくは書を繕ふは御謝していふとあり馳馬の車  
のすはまきやよめそくくくく人のちりさよは  
似まの順れといふもの行るそまはくくくくく  
くわくくわくくくくく八橋まくくくくくくくく  
只くわくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

拾扇話

人の心より得るを湯といひ交易して得るを餘といふ  
のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
せくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
秋の山路の落葉もひろく拾ふもくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
得るを天のよめといひて人のくくくくくくくく  
慾は血長衣をのこ天すあくくくくくくくく  
角子をくくくくく牛の糞はくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
の甚くくくくくくくくくくくくくくくくく  
刃上破滅は及くくくくくくくくくくくくく  
又くくくくくくくくくくくくくくくくくく  
知んぬぬいそ活を拾ふゆゆゆゆゆゆゆゆ  
成めくくくくくくく知楽舎のくくく人途は一柄の扇は  
拾くくくくくく人の落くくく物くくくく其めくくく腰を  
撫てくくくくくくくくくくくくくくくくく



三務集序

信濃うゝ約うは嶽い名よめあふ士の侍と四時のす  
くくくたの名所くくく吉野も卯日のあくくく  
次くこれ淀のくくりの郭公も声くまのく須戸  
更科の月くくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
雪の名あくくくくくくくくくくくくくくくく  
漆向の煙くくくくくくくくくくくくくくくく  
好事の三士集促りてす。排くくくくくく集成りて  
影早くと三務くくくくくくくくくくくくくくく  
ありてそれハ女くくくくくくくくくくくくくく  
はありてそれハ排きと人の各羽の字をくくくく  
いす其初ハくくくくくくくくくくくくくくく

とくくくくくく異國のくくくくくく我朝もくくく  
季そらあくくくくくくくくくくくくくくくく  
不自由なりてくくくくくくくくくくくくくく  
ぬハ仙人くくくくくくくくくくくくくくくく  
むくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
いすくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくく朝起くくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
ひくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
付くくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく



不才のあつたつて辞せしむるは彼の思ひ合す  
夢あり天已は思ふ定め物己よりと道すまは  
論すまはと只此物よりと述て其やめは代り  
よま其輝のくまの差の次よとちと驥尾よして  
千里は波と遺こむに李漢より韓文よ序くこと世よ  
あつたつてめしむるは似たりと厚彦よ筆よりと  
翹よまはととふり

法樂能諧序

閑説むるは法師とて百藝の人をのるは  
ささして残すは今世よりなりては  
老翁の家よ求得りては  
あつたつて通り黒田氏金月子の  
あつたつて黒田氏言て城南の津の里よ別荘は  
あり此地よ名よやめ由士の高松より  
あつたつてあつたつて富士と  
金月子の書文とて言はれは韓使の知  
あつたつて時異客のよは清じて  
あつたつてあつたつて  
富士とてや其余を州の信投信列の清  
あつたつてあつたつて南は指ぬる  
勢田の海ほよりすて當國の  
あつたつてあつたつて  
あつたつてあつたつて



坊々わく句われいしよ支吾を定めけりわいしよ  
放推と論せし今更し往しゆ思ひ老を深き  
白鬢はくしんふそ一晩掬詞を汎て曰  
句中所謂<sup>ラツキヨ</sup>嘉子者生前所嗜<sup>タシム</sup>酒必<sup>マムルニ</sup>為<sup>ラフ</sup>下物且  
石榴一株嘗<sup>チ</sup>與<sup>リ</sup>予<sup>ニ</sup>今猶存<sup>ス</sup>庭畔<sup>ニ</sup>

其<sup>ナ</sup>歡<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>今<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>  
世<sup>ニ</sup>はなんそけ<sup>ニ</sup>也<sup>ナリ</sup>

面<sup>ニ</sup>影<sup>ハ</sup>ぬきぬき  
暗<sup>ク</sup>の目<sup>ハ</sup>枯<sup>レ</sup>なり  
音<sup>ハ</sup>信<sup>ハ</sup>なき  
夕<sup>ノ</sup>の汽<sup>ハ</sup>蒸<sup>ル</sup>なり

心<sup>ハ</sup>の海<sup>ニ</sup>を添<sup>ル</sup>なり  
下<sup>ニ</sup>草<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>

酒<sup>ハ</sup>の味<sup>ハ</sup>と  
赤<sup>ク</sup>顔<sup>ニ</sup>なり

向<sup>テ</sup>の甘<sup>ク</sup>菓子  
酒<sup>ハ</sup>の味<sup>ハ</sup>と  
記<sup>ス</sup>念<sup>ス</sup>の石<sup>ノ</sup>榴  
在<sup>リ</sup>

他<sup>ノ</sup>ありや  
あはれ

經<sup>テ</sup>夜<sup>ヲ</sup>や  
無<sup>ク</sup>

巴<sup>ノ</sup>雀<sup>ノ</sup>末<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>  
我<sup>ノ</sup>親<sup>ノ</sup>父<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>  
吟<sup>ハ</sup>老人<sup>ノ</sup>及<sup>シ</sup>い湖<sup>ノ</sup>春<sup>ノ</sup>  
今<sup>ノ</sup>七<sup>十</sup>年<sup>ノ</sup>の<sup>後</sup>是<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>其<sup>ノ</sup>の<sup>一</sup>也<sup>ナリ</sup>  
一<sup>ノ</sup>巻<sup>ノ</sup>の<sup>二</sup>吟<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>今<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>





けふもきんはさうし紙燭をて母と近ういよる母の業火を  
いと他とさし事あるはさうしとてはやくも母の  
と親すれは

火とさうしに事ぬぬいへし続れさう

送其常侍

浮藻のたのあつしつらう仕度なきさうしこのふまて  
侍り方のまじき紋のあつしつらうさうしこのふまて  
つらうて益をよて鎌歌とさうし各城別今幸竹は後河  
さうしとて是よりさうしの便とさうし  
さうしとさうしとさうしとさうしとさうしと

蟬引

三伏の日さうしの夏にたつしと

蟬あつしつらうさうしとさうしとさうしと  
とさうしとさうしとさうしとさうしとさうしと  
さうしとさうしとさうしとさうしとさうしと  
死のさうしとさうしとさうしとさうしと  
は林の蟬

賀其別装文

後父う日御はねは瀬流を舟とさうし林の風とさうし  
さうし官路のあつし中さうしとさうしとさうしとさうしと  
さうしと安とさうしとさうしとさうしとさうしと

世の繁華をけしきり川べのからんはれお入あふ

滄浪の木まはるはら中あふ

星夕賦

今宵の星の逢夜あふりて小娘の昔侍わたり  
子にきかふはさしきりて見送の枕の榮末め毎に  
一年の京高きうらみ半おとせききりては  
物さへあめりきりてみえはるのほろろ天  
のまじり雷のまじり星のまじり階の舟に愛は  
は天上下界のまじりあふりておとせききりて  
き枝の名のまじりあふりてまじりあふりて  
あふりて浮舟の神まじりあふりて西瓜のまじり

あふりてあふりてあふりてあふりてあふりて  
あふりてあふりてあふりてあふりてあふりて  
あふりてあふりてあふりてあふりてあふりて  
あふりてあふりてあふりてあふりてあふりて  
あふりてあふりてあふりてあふりてあふりて  
あふりてあふりてあふりてあふりてあふりて

赤し西瓜のい 竜田 娘

あふりてあふりてあふりてあふりてあふりて  
あふりてあふりてあふりてあふりてあふりて  
あふりてあふりてあふりてあふりてあふりて  
あふりてあふりてあふりてあふりてあふりて

七 歳 記

あふりてあふりてあふりてあふりてあふりて  
あふりてあふりてあふりてあふりてあふりて  
あふりてあふりてあふりてあふりてあふりて  
あふりてあふりてあふりてあふりてあふりて

静なるるを之り今又半掃庵とて表おく所のめくれ  
掃目よりいけぬ日多く床は座をたし流泉はほとり  
なる庵のたけはをいふへり名を二つとてお二つと  
おきぬいれしを系を撰ふ

東嶺孤月 路傍古松 蓬丘烟樹

海天帰雁 龍真寺鐘 市門晚鶏

隣舎春歌

赤嶺孤月とて流しにけり路傍古松の遠き山々の美も  
此のつとよりいけぬ日多く床は座をたし流泉はほとり  
なる庵のたけはをいふへり名を二つとてお二つと  
おきぬいれしを系を撰ふ

文字を撰投し書らるるをいふは路傍古松の遠き山々の美も  
此のつとよりいけぬ日多く床は座をたし流泉はほとり  
なる庵のたけはをいふへり名を二つとてお二つと  
おきぬいれしを系を撰ふ

路傍古松とて世にせむはなれりありあり相生めきては  
もあゆ又松屋たりては松もあゆ流ねけ雨のしほは  
雪の朔ちうりては松もあゆ流ねけ雨のしほは  
下りいけしをいふ幸崎のしほいふいふありあり相生めきては  
よむいふいふ

蓬丘遠樹ハ熱田の正社ハ一のりさきの社ハ行らして  
鹿嶋の嵐ヶ草の南の觀たけい葉もはるかに花は  
曳くあとの華表<sup>トリ</sup>本の間ハ花のあはれ熱田の  
仁見の里吹雪の里は花は後中津の里ハ熱田の  
あはれはるかに花は行らして是熱田の浦さ  
やいりきかかかたも家店ハ行らして花は  
のりさきの社ハ

海天新雁ハあはれはるかに花は

竜真寺傍ハ唐の茶も花は行らして本三ツ村の  
花は行らして花は行らして花は行らして

とてはるかに花は行らして花は行らして花は

言て曰答ハの茶も花は行らして花は行らして

の花里ハ行らしてあはれ春東竹のりさきの

少年旅客の花は行らして花は行らして花は

て花は行らして花は行らして花は行らして

形たはるかに花は行らして花は行らして花は

とてはるかに花は行らして花は行らして花は

と答ハ花は行らして花は行らして花は行らして

市門の曉霧ハ西の方あはれ花は行らして花は

はるかに花は行らして花は行らして花は行らして

はるかに花は行らして花は行らして花は行らして

ハ花は行らして花は行らして花は行らして

もの市門ついでに晩のなほ花うらひの巻のむすのし  
らゝゝゝ

陣舎の巻舟をこむいよりの農家の回ちんはふは及守  
のしつかのいひなかりし大いむのほふいふを  
たふふ家なるもやあらんしんを許の業  
いひし美の海福の海あらん結の「ナ東」もつら  
もなるしんをす京しんをせむらうらゝゝゝゝゝゝ  
遠東の衣しんをたつた貴ららふしん水の舟絶しん  
しんをしんをふらんのいひしんをの厚味しんを  
漢書のくしんをしんをしんをしんをの国をしんを  
あや

不羨庵記

堅くしんを母のいひしんをしんをいひしんを  
さあしんを勢も尾指の彼しんをいひしんをいひしんを  
人しんをいひしんをいひしんをいひしんをいひしんを  
なしんをいひしんをいひしんをいひしんをいひしんを  
ましんをいひしんをいひしんをいひしんをいひしんを  
るしんをいひしんをいひしんをいひしんをいひしんを  
ふらしんをいひしんをいひしんをいひしんをいひしんを  
早しんをいひしんをいひしんをいひしんをいひしんを  
よしんをいひしんをいひしんをいひしんをいひしんを  
ましんをいひしんをいひしんをいひしんをいひしんを



このありとも存信されし人の心もあらはしはるるあり  
日月はたふしやうの月影をよひつゝとほつゝとれは佳のたまひ  
一昔院籍うあまひつゝとほつゝとれは佳のたまひ  
つらつらとせしきえとほつゝとれは佳のたまひ  
よび各よと守令は平の官路のたしむる女は若おんはむ  
と共く衆を交りてれをたし守の忠とほつゝとれは佳のたまひ  
あつちとてねいひつゝとほつゝとれは佳のたまひ  
かんそろふとてふらんあつてん令路のたしむる女は若おんはむ  
若くは困るゝ体て白露のさひげのつゝとほつゝとれは佳のたまひ  
らむしとま白令の名生つゝとほつゝとれは佳のたまひ

と不思議後序

和歌の西行あり連舟は宗祇あり能治は色甚義ありて三  
さうしんしは留雪水は境界と守文人路士も師もむ  
ものつれは能治もろ人の杖も鞋のさひげつゝとほつゝとれは佳のたまひ  
あつちとてねいひつゝとほつゝとれは佳のたまひ  
用眼も佛のたぐ抱せらるる娘のつゝとほつゝとれは佳のたまひ  
つゝとほつゝとれは佳のたまひ  
けむりのつゝとほつゝとれは佳のたまひ  
風船はあられも健の事はつゝとほつゝとれは佳のたまひ  
西の指もあられも健の事はつゝとほつゝとれは佳のたまひ  
けふつゝとほつゝとれは佳のたまひ  
法行は能治の行もつゝとほつゝとれは佳のたまひ  
つれはたしとて宗祇の指もあられも健の事はつゝとほつゝとれは佳のたまひ



以先一同志の徒ありて鶏黍の約をなすべしを復と  
倒よそと鉢の木と蚊もよなきてもあやふりてさし  
更ぢらるる事紀行とていふべし一人紀行の稿を示  
す末二三條の白を附 たるふすお書とてその後あり  
とそとれ條なきこの条もはやあひよふたふふは  
主人の遠遊し統るはつこのふと行越の結露のこゝ方やさし  
いんと白一書して贈る

拾う梅八扇とこゝの別條より

贈晚吾辞

晚吾子と我まゝ公の悲歡了と五十年塵生うまの物定  
はりりし淋しと老と若致仕とくふふお勢いありて  
うき世にありていふは 此の梅八扇とていふ  
贈る

梅る情や世と卯のたを跡の事

巻記 直晚吾齋

緋鬘たる黄鳥の丘隅よびるし止らば梅なり世は雪水と進  
小僧侶の一心不任をすらすら後の宿もいふまゝやまた  
も年老豆弱くも止ら梅をくそやハ有入き恒の梅たき時  
恒の心静かすすいふなりは病のこの巻むすへるこゝやま  
り姉ありて初々の祭と臨れも帷子の三万二千ハ一  
女置まらぬ佛一ハ一竹灯一ハ第一ハ茶瓶ハ火燵よりへ  
く祝礼ハ屋敷よりハ外具と納る澳あり去籍をわける祭あり

藤を容れたいと女一れ女の防府外の設い〜のま〜  
費、まき豊だ、姑く文評の爲り〜して〜をこの天地を  
世へ〜は狭〜〜ある〜は信ひろ〜をふさ  
り

牧屋つりてく〜あ〜りあ〜の草の庵

蝸牛奇頌

稍〜おれぬの勢〜ありち〜おれぬの〜  
の連流る車二〜つ〜い〜に〜女ま〜  
あり〜い〜ふ〜の〜

葉〜い〜穴〜あ〜る蝸牛

黄圃集

世の米を食住の三つありて一日かて〜  
ほ〜め〜して輝き〜は只樓下〜  
のた〜い〜や家ま〜い〜亭〜  
月したのま〜の冷を〜  
宮の出〜の春たの遊〜  
よ〜い〜を春〜  
ふ〜ね〜桐〜  
〜して〜  
山の街道〜  
の〜ま〜  
目〜い〜

の昔もあつたのたよひもなきに舟人の影さる也詩客の吟  
に入るもさるもあつた人ありては事よ名と求  
且記さるも詩に半度くさし話も又及らりきり  
し我れもさる半ありは居のよめりわたり竹の林くさり大  
なるお椽のこしと是れは家なきもさるもあつたし  
のよりの友なきも此の世なきもさるも半ありは美園  
事とあつたも同くもさるも女才なきもさるも半ありは  
よ言のさるもさるもさるの記なきもさるも半ありは  
らさるもさるもさるもさるもさるもさるもさるも  
と頼りは事なき

各茶抄序

東抄の巻を對してはさるもさるもさるもさるもさるも  
あつたもさるもさるもさるもさるもさるもさるも  
さるもさるもさるもさるもさるもさるもさるも

茶抄の巻

花鳥山賦

くさるもさるもさるもさるもさるもさるもさるも  
さるもさるもさるもさるもさるもさるもさるも  
強がさるもさるもさるもさるもさるもさるもさるも  
情は遊人さるもさるもさるもさるもさるもさるも  
てはいさるもさるもさるもさるもさるもさるもさるも

あはれ

ちり残り茶をいませありたのめ

山ト子母のまじりありてあはれなり  
まゝ田部村落のゆゑあはれなり  
誓ひあり

まじり田部村のまじり

贈所訪不遇人文

あはれ茶の園をいませありてあはれのまじり  
留まのまじりありてあはれなり  
あはれの思ひありてあはれなり

あはれ茶の園をいませありてあはれのまじり  
あはれの思ひありてあはれなり  
あはれの思ひありてあはれなり

あはれ茶の園をいませありてあはれのまじり

あはれ茶の園をいませありてあはれのまじり

あはれ茶の園をいませありてあはれのまじり

あはれ茶の園をいませありてあはれのまじり

あはれ茶の園をいませありてあはれのまじり

されは子の人の何とてお成は山林はむらひの物とらむま  
めてこの居は清きも官士の上にはたていらぬころを  
とめはいてや印を解さ冠とつけをやと世を逐鹿の  
心も誘へし孟母のねと信を誓もとらねたり水田氏  
の居宅は御橋とらとて金鑄きも軒は輝き朝日夕日  
の縁はちりとして人早くおとらる繡のそと掲ぐ  
をすこと海はむらり官路はまきまの志わら眼は  
昔にうへに清き世を作ると世縁のこも思ふ  
しなへて後回の忠情に接むるこもつて切なり  
名は後とて子孫は長くは傳りてこの山林は  
らむとて長く孫生とて安くまらぬ今はいはれ  
とて志むる人はいれとて世はむらりて  
其書はあはれ人傳りてとて世はむらりて  
すりも早くはあはれ安くわらり

訪以文辞

以文字君にさしいそまをりて来る路の可きとて  
うけ橋は清き詠をうけて野園の折はこころに  
家語とまらけ新宅は馬とてこころに  
うやの白いは行旅のやせむ今こころに  
あすは叶いてわらの風流いらぬとて  
ゆめはあはれこころにわらぬとて  
生ぬまはまらぬのきやあはれ

嘯荅詩

絃と断剣とけりむうの浪袖よきりてこころも  
一つの好くは歎れぬるあり梅軒の嘯荅子いまは  
こころを一朝とけり中林の月よも待て故郷の音も  
ぬくつらと目よとぬ風の音よゆくゆく  
よれつひよとてひくよきの翔とてまて悲  
ていんんくちなり誰とてまてんけ荅子武門乃  
藝能化は勝れ百事百成の意申のこり海く蕉門の  
慕ひるこけり一口にゆるの宿ゆと試と又の夏中  
百部の口ぬらとてぬ明き風雲よあふぬに魂を  
かやまていひ道の大悟せむい昔の謬をり  
こり我ぞといふもすせたりむ金の子久く

月の夜は雪の朝會其人われ我を  
うけて荅子たのまをちと一宵の口やよ荅子  
天象時きのこころを好く我は人事の上もて昔  
こころをいふわれもこころをいふ  
是に我をいふそのうをいひてわれは我をいふ  
い  
なりの思ふたこころをいふ  
夜をいふ  
よこの行樂はよあひ合吸筒をさ行ひて  
なりのいふひのけ春君の清きによりて我は  
官をいふ  
あり卯月の露の衣よぬて百里のよあひ



秋う枝のかしこもうろくはぬこけてよこのめしりき  
つれど死ぬくもろくせんこれに辞世のうたを思ひ  
つゝももむい骨折となりぬくふちこころち  
こころをいさあふゆーかきりりのをゆいこ  
ころあはん今ハ日よきこころかつかうりくふん  
かきりりしこやと一夜のゆき一ぱんた  
むういこつゆの今更は目のまをこころを  
うんーこころ気色おくれハ又こころこころを立つ  
こころははりれこころをわたりこころ我情を子う誅か  
こころははりこころは袖をぬくこころをこころも世も不  
かこころ人の縁をると有まこころをひの指をゆり  
またこころこころをこころを又其人を  
むうこころこころは涙こころをこころ起て思ひ出こころを  
隣笛は揚と断て一うとよらぬのこころ

誠こころはまき思こころを初まくれ

悼雀此文

今年の秋はあこころ誰れは誓ひ一命なりこころは毎  
日の晦りも孫井氏が雀此文よりぬこころ短夜の程  
はなこころはいますこころは廿四より月夜のこころ  
こころはこころはもあこころは深く風雅はこころは  
才の勝れこころは只明香のこころはまいこころは  
めてこころはこころは只け人こころはこころはこころは  
こころはこころはこころの度こころはこころはこころは



世はわゝハ蕉門の一旗の大ぬゝいゝに秀つへさ  
器をけり夏野の露とんませし恨もふ序後せぬ人の  
袖も雅々目の川浪もあやしくくさ今ハ全なきたす  
よゝいゝと聲をぬよ一匂よよるけり

こぬつれあまろみ月も片くもり

悼ハ龜辭

時を庵のぬゝ乃すりぬ訓むらゝ一月を思ふを後  
こゝよ林やゝゝ我慮乃巽よあつりて其わゝゝ  
遠くゝねハ夕アの空うと立のわゝはるめに空を詠やり

故やりよも泣てゝゝ野の煙うあ

悼五條坊文

六、菴よ別れ反唇合世とさり一其折ゝの傷ふゝ  
行け五條坊の徒たゝ忍山のいゝなゝ其世のゝ  
うゝゝいゝ出てをよ磨むつゝゝゝゝゝゝゝ  
其舞のゝゝかゝゝ秋ゝゝゝ待も世水と毎月のゝ  
惜むゝゝゝ一杏竹卒よ齡と禱ゝゝ松中よりゝ  
いゝゝゝ我ゝゝゝゝ誰れゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ちゝゝ友よ泣くやゝの羽めけり

信信別本射山

始山いゝいゝゝゝゝ宗匠某よゝゝゝゝ名ちりゝ  
けゝゝゝの暮合て出まて改名の字を予にのゝゝ

け名を思ふよめてくさ姑射山の字を搞てくさいしり  
ちしちくさ上の一字を置きて射山とやいとむ下ろ  
一字とあつてめて姑射とやいとむいづれとめよ喜を  
失く二つと一つを定めむわの撰よあつてくさ  
序よくさ

かや山く名をくてか子身

与某文

好て豪飲よ耽る人ありいた思ひよくさ有らん忽  
ハ仙め仲満と遊れて今ありいと酔くく固く折  
くさ行末の乱我をくさくさめくさ右よ守  
くさ酒を書て得てくさくさ酒をくさ下戸あり  
酔て面白く申ん止てよ申ん其の酔をくさ  
其責のくさあつてくさくさくさくさくさくさ  
あつて

神もくさくさ酒をくさくさくさくさ

一を名画賛

け画を誰とくさくさくさくさくさくさくさ  
容顔くさくさくさくさくさくさくさくさ  
菊はくさくさくさくさくさくさくさくさ  
白くさくさくさくさくさくさくさくさ  
冬菊明くさくさくさくさくさくさ  
菊くさくさくさくさくさくさくさくさ

定茶名文

茶味わつこは製して名といふ、定めむ、採よし、  
とりあつとも雑の一向を茶も、白葉

茶のト子わあ、片の、松

こねる、まく、い、

酔、雀亭記

こよ、呉竹の、酒、  
む、い、の、わ、い、  
常、  
土、  
強、

次、  
得、  
付、  
卒、  
静、  
あ、  
持、  
且、

極、千、居、記

居、  
所、  
号、  
と、  
定、  
て、  
後、  
人、  
わ、  
り、  
其、  
人、  
の、  
り、  
名、  
を、  
楓、  
水、

よふ枕をぬきあそむ夜の綿よりうららかなる無きれ綿よ  
 きり夜行り〜〜高き〜〜人よあらぬあそび〜〜  
 辞〜〜これ〜其業と伴は長き世談のあつた人あつた  
 こゝ白く〜向き〜けは是つ〜のあまひ〜すれ  
 牙は徳あり家あるまゝいた〜〜ん〜世り  
 ぬのつ〜〜〜れ〜〜綿を〜細〜〜  
 ぬの〜〜〜物と様は只其夜の綿〜床  
 ぬの〜〜〜ぬの長久の綿を〜や〜ぬの  
 ぬの〜〜〜世り〜十秋の二字は定め〜  
 す〜其唱古〜〜〜世字と上下〜  
 う〜〜〜〜〜  
 秋千君の二字と影〜〜の求〜〜  
 終〜

俳諧五七集

全五冊

枇杷園先生いはいえん一世の推英おしえ々々雄名海内ゆうめいかい内はるる  
 生涯しやうがの俳諧はいかい救きう〜らば多き中ちゆうも猶なほ又また風流ふうりゆう新奇しんきぶ  
 數篇すうぺんをえらび三十五部をうらまてあつて五七集とよ是こゝて  
 先生しやうせん生涯しやうがの俳諧はいかいハ足あしにならざる事ことあり善ぜんそ〜  
 世よのその流りゆうをくむくハ勿論もちろん他門たもんの人ひとも足あしをみ〜  
 玉たまをらら金かねをらりむめ〜詞花しけ言葉ことば〜その餘あまの群英ぐんえいの  
 白しろまでひろく識し〜き重宝じゆうぼうとハけ書かきなり

尾陽書肆

東壁堂欽白

早稲田大学図書館

011688991007